

◆【御船印めぐりの旅】 - 小笠原海運株式会社 - 東京～小笠原諸島・父島を結ぶ「おがさわら丸」の旅

小笠原海運の「おがさわら丸」は、東京竹芝から小笠原諸島父島まで、約1000kmの距離を24時間で結ぶ。

本船は、2016年に就航。前船から運航時間を1時間半短縮した。また2011年に小笠原諸島が世界自然遺産に登録され、旅客数が増加したことから、旅客定員を増やした。個室数も増やし、プライベート空間の充実を図っている

小笠原諸島への玄関口・東京竹芝の客船ターミナル。周辺は、オフィスビルやホテルなどが海上公園と一体的に整備され、海に親しむ空間となっている。そこから「おがさわら丸」に乗り、小笠原の中心・父島へ向かう。乗船前に靴底の泥を落とし、服などに種や虫が付いていないかを確認。父島に外来種を侵入させないためである。

父島を含む小笠原諸島は、大陸と一度も陸続きにならなかったことがない。そのため、小笠原にしかない生き物の割合が高く、陸産貝類（カタツムリなど、陸上に生息する貝類のこと）では94%にもなる。固有のカタツムリを捕食し、絶滅の危機に追い込んだのが、ニューギニアヤリガタリクウズムシ（ニューギニア原産でヤリ型の、陸に住むウズムシ）という外来生物だった。

また小笠原はアオウミガメの日本最大の産卵地でもある。周辺にはイルカやクジラも多数生息し、父島の船客待合所前にクジラのモニュメントが建つほど。

父島

小笠原諸島最大の島で玄関口の父島は、兄島、弟島とともに母島列島を形成している。年間を通じて温暖な気候、美しい海と独特な生態系が、世界自然遺産にふさわしく、訪れる人々を魅了する。森には、オガサワラビロウ、タコノキ、蒼く澄んだ海には、クジラやイルカ、ウミガメが泳ぎ、星空の下、オガサワラオオコウモリが飛びかうこともあり、貴重な自然に包まれている。

「おがさわら丸」から父島へ降り立つ。父島の面積は東京千代田区の2倍余り。地形は急峻だが、集落地は比較的平坦。気温の変化は少ないが、湿度は高い。

小笠原諸島の発見は、1543年にスペインの航海者、ルイ・ロペツ・ビラロボスの率いる探検船隊の小型帆船サン・ジャン号が太平洋を調査探検中、10月初旬に小群島を発見したが、飲料水不足のために上陸せずに帰ってしまい、その後1593年10月に、深志城主の小笠原長時の孫にあたる貞頼が、徳川家康の許しを得て出航し、八丈島の南東洋上で無人島を発見して島の品々を持ち帰り、家康から「おがさわらじま小笠原島」の名を賜ったと伝えられている。

中山峠

南下して標高110mの中山峠へ。眼下には小港園地が広がり、林の緑と浜の白、海の青のコントラストが美しい。浜は、サンゴや貝殻などの細かい破片が堆積してきた、アオウミガメの産卵地でもあり、卵は40～60日で孵化し、稚ガメは夜の海に泳ぎだしていく。

南島

さらに南下し、父島南西沖に浮かぶ南島へ。外海とトンネル状につながる扇池が、息をのむほど美しい。ただ海況によっては上陸できず、上陸できても足元の悪い個所が少なくない。自然環境保存のためにルートが定められ、ガイドの同行も必要なほか、入島禁止期間も決められている。

◇◇ ◇◇◇◇ ◇◇◇◇◇ ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ ◇◇◇◇◇ ◇◇◇◇ ◇◇

世界自然遺産・小笠原諸島へは大きく、速く、快適に進化した「おがさわら丸」に乗って向かってほしい

— 船舶要目 —

▽総トン数=1万1035トン ▽全長=150m ▽全幅=20・4m
▽航海速力=23・8ノット ▽旅客定員=894名

一般社団法人日本旅客船協会の公認事業である「御船印めぐりプロジェクト」では、参加会社の船や航路ごとに発行するさまざまな御船印を集めることができる。

御船印とは、神社仏閣めぐりで集められる御朱印の船バージョンで、日本各地の船をめぐる船旅の楽しみをさらに盛り上げるため、プロジェクトに参加する船会社のオリジナルの御船印帳・御船印紙を購入し、旅客船や観光船などに乗船した際、船旅の思い出を彩る記念の押印（スタンプ）をいただくもの

「海員だより」